

平成20年度 市民と市長のまちかどトーク

- 1 日 時 平成20年8月31日（日） 午後2時30分～4時
- 2 場 所 ロビンソン百貨店 4階ギャラリー
- 3 開催テーマ 語り合おう!新しい小田原～市民の力を活かすまちづくり～
- 4 参加者
 - (1) 一般市民：151名
 - (2) 市側出席者：加藤市長、加部副市長、大野副市長、理事企画部長、秘書
広報担当参事、広報広聴室（事務局）

5 意見交換の一覧

<u>(1) 小田原に美術館をつくってほしい</u>	<u>1</u>
<u>(2) 団体に所属していない市民の発言の場をつくってほしい</u>	<u>2</u>
<u>(3) お城通り再開発事業の進捗状況を教えてほしい</u>	<u>3</u>
<u>(4) 市長の市民ホール等の発表は残念である</u>	<u>4</u>
<u>(5) 市長の市民ホール等の決断は英断である</u>	<u>5</u>
<u>(6) 情報公開を進めてほしい</u>	<u>6</u>
<u>(7) 酒匂川流域を一体としたまちづくりを進めてほしい</u>	<u>7</u>
<u>(8) 地域の活動に参加するよう働きかけてほしい</u>	<u>8</u>
<u>(9) 企業とのかかわり方について</u>	<u>9</u>
<u>(10) 待機児童数について</u>	<u>10</u>
<u>(11) 太鼓演奏を活かしたまちづくりについて</u>	<u>11</u>
<u>(12) 合宿施設を整備してほしい</u>	<u>12</u>
<u>(13) お城通り再開発事業等にかかる一連の報道について説明してほしい</u>	<u>12</u>

意見交換の概要

(1) 小田原に美術館をつくってほしい

- ・ 小田原の文化について提案したい。私は退職して市主催の水彩画教室に参加した。その後、参加した仲間会を作り、それ以後、画廊を借りて発表会をしている。しかし、最近は画廊を借りる料金が上がっており、私たちの立場のような退職した者は、年金生活のため負担が非常に厳しい。発表をやめるものも出てきている。そこでお願いしたいのは、小田原に美術館をつくっていただき、発表の場を提供してほしいということである。
- ・ また、私は平塚の美術館によく行くが、その特別室に酒匂出身の井上三綱さんの絵が飾ってある。小田原の住民としてはなんとも悲しい。そのようなことも美術館があればなんとかできるのではないか。

加藤市長

- ・ 市民の力を活かすまちづくりには、市民の皆さんに市政に参加していただく部分もあるだろうし、お話いただいたような、行政が市民の皆さんの活動をもっと育てていくようなこともあると思う。
- ・ 小田原には多くの市民活動があり、これは分野も数も内容も誇るべきものだと感じている。これを育て、勇気づけていくことは、本当に大事なことだと思う。そういう意味で、受け皿となる拠点・施設の設置は大事である。井上三綱さんの絵が平塚に行ってしまったということも大変残念だ。
- ・ 美術館がほしいというご意見であるが、美術館の規模は大きいものから小さいものまであり、運営方法も業者がやったり、市民のボランティアがやったりといろいろな形がある。当初、私にも「小田原に美術館を」という構想があった。現在の本市の状況では、敷地的にも事業的にも大変難しいものがある。しかし、私はもっとささやかなものでも構わないと思っている。既存のスペースなどを使ってつくっていくことも十分可能だと思っている。

そういったことも含めて、一回でも多く皆さんの活動の場に接し、意見交換をしながら、考えていきたい。

- ・ また、今回の（仮称）城下町ホールの建設でも、常設展示スペースがないというのが、大きな課題の一つになっていた。今回の話は、新しい市民ホール、あるいは駅周辺のまちづくりの中で、そういったスペースを確保するということは必須だと思っているので、これからいろいろと検討していきたい。

（２）団体に所属していない市民の発言の場をつくってほしい

- ・ 市長の話の中に地域運営協議会という名称が出てきて、団体名をいくつか列挙されていたが、私はどの団体にも所属していないため、その網に引かからない。しかし、私は一人の市民として、まちづくりには非常に関心を持っている。そういったどこにも所属していない市民は、どのようにまちづくりに参加できるのか。また、ぜひそのような場面をつくっていただきたいと思っている。

加藤市長

- ・ ご指摘いただいた点は非常に大事なことである。現在25地区で行っている「市民と市長の地区懇談会」は、地域の中で活動している一定の方へのお声かけになってしまっているが、地域の中にはお役には就いていないが、いろいろな意味で能力やお気持ちを持っておられる方々がたくさんいらっしゃる。
- ・ これから立ち上げていく地域運営協議会では、そういった方たちの声をどのように把握するのかということは、重要な論点になってくると思う。このことは、これから先のつくり込みのプロセスの中で論点として確認をしていきたい。既存の活動にも参加していただけたら幸いである。

(3) お城通り再開発事業の進捗状況を教えてください

- ・ まちづくり、地域経済に関連して、お城通り再開発事業の件でお聞きするが、建設事業者であったアーバンコーポレイションが民事再生法の適用を受けたとのことであるが、この事業の進捗状況をお伺いしたい。

加藤市長

- ・ お城通り再開発事業は、私も懸念していた事業案件であったが、これを今後どのように、市民にとって、また小田原の未来にとって適切なものにしていくかということに心を砕いてきた。一方で、長年の間、地権者を含め、利害関係の方が関わっている状況の中で、非常に難しい取り扱いを求められてきた。いろいろな可能性、また複数の選択肢を置いて検討を重ねてきたし、所管には地権者の皆さんに対し、きめ細かいフォローを行うよう指示し、コミュニケーションを続けてきた。
- ・ そのような中で、8月13日にアーバンコーポレイションがあのようなことになった。その後、地権者の皆さんも不安な気持ちを抱えながら、事態を見守っていると思う。現時点では、今後のアーバンコーポレイションが、法的にどういう取り扱いになるのかということについて、裁判所が選任した監督委員の正式なコメントを待たざるを得ない状況があるが、市を含めた準備組合一体としては、できるだけ早い段階で、覚書に対する意思表示をしなければならないだろうというところまでは、概ね共有できていると思っている。それを具体的にいつ、どうするかといったことについては、先方の対応の関係がある。
- ・ いずれにしても、今の段階では、市と準備組合がお互い手を携えて一緒にやっていくしかないので、これから先は協力関係の中で進めていける状況になっているというご理解で結構である。

(4) 市長の市民ホール等の発表は残念である

- ・ 市長は8月29日に、市民ホールを駅前からこれまでの建設予定地に戻すという発表をしたが、これは公約違反であり、市民の中にも非常に残念がっている人が多くいる。9月2日から議会が始まるというのに、その前にあのような形で発表するのはあまりにもひどいと思う。
- ・ これまでの加藤市長の説明から見ると、今回のことは裏切り行為だと感じている。お城通り駅前再開発事業にかかる条件などについて、市長は立候補する前から分かっていたと思うし、自分も分かっていた。昨年8月のアーバンコーポレイションの説明会のときに、なぜこんなことを議会に通したのか、また怪しい会社と契約したのかと指摘をしたが、そのとおりになった。所管とも話をしたが、「様子を見る」との回答であった。
- ・ これからは、つぎ込まれた7千万円もの税金をどう回収するのか、などといったいろいろな問題が出てくると思うが、いち早くプロジェクトを組んで、弁護士とも相談しながらやってもらわないと、税金の無駄遣いになる。一連の市長の説明を聞くと、市の事務方に追いやられているような気がする。市長はもっと自分の意志を持ち、またこれから始まる議会とも話し合ってから結論を出すべきであったと私は感じている。

加藤市長

- ・ 今回の報道を受けて、そのように受け取られる方もいらっしゃるだろうということを覚悟した上で発表した。市長就任前は、まちづくりに対する様々な可能性を考えた上で、駅前に市民ホールをもつてくるのがベストな解決策だろうということで臨んでいた。
- ・ 市長就任後、調査やシミュレーションを重ねるとともに、市民の意識やこれまでの検討経緯などを改めて確認をした。その結果、今の市政には市民の命に関わる案件や課題が山積しており、その検討を本格的に、しかも直ちに進めていかなければならず、また時間的な制約もある中で、何を選択することが大事なのかを考え判断をした。
- ・ 市民ホール等の立地については、複数の案を残したまま議論をして、市民

の皆さんや専門家の方々の意見を聞き、最終的に自然と案が残っていくと
いうような、時間に委ねるだけの余裕があればいいことは分かっているし、
分かりきっていた。しかし、立地についての議論を、2年も3年もかけて
延々と行っているのは、ほかの議論に対するエネルギーを使うことができな
い、また選択もできない状況にあるということで、そこは私が判断した。

- この段階で、市民ホールの立地は三の丸地区に戻すが、市民ホールもお城
通り地区再開発事業もすべて計画は見直しである。今後については、駅前
の案件や市民ホールの置き方、また三の丸地区の用地の拡大等の議論を、
市民や専門家の皆さんに委ねていきたい。よって、これから先は、これま
で再三再四お伝えしてきたとおりの市民参画のプロセスに入っていきたい
と考えている。早くその段階に全市一丸となって入っていく状況をつくり
出すことこそが、今の小田原には重要なことであると考え判断した。ぜひ
ご理解いただきたい。

(5) 市長の市民ホール等の決断は英断である

- 8月29日、市議会議員に対し市民ホール等のことを説明したと、新聞紙
上に掲載されていた。市民の中にはいろいろな考えや意見も持った方がい
ると思うが、今回の市長の決断は英断だったと思う。
- 現在の市民会館は耐震性の問題があり、それは市民の命につながるもので
ある。もし、この問題を長引かせて市民会館に何かあれば、それは市長が
マニフェストに掲げている「いのちを大切にする」ということにも関わって
くる。いろいろな意見があつてしかるべきだと思うが、私は市長の判断は
聡明なものであったと言いたい。

(6) 情報公開を進めてほしい

- ・ 今回のテーマである、市民の力を活かして進める市政に関連して述べさせていただく。現在の小田原は非常に厳しい市政状態にあると思う。市長が言ったように、待ったなしの課題がたくさんある。どうしてこのような状態になったのかを一度明らかにしなければならないと思っている。
- ・ 市民にとって大切なことは、行政が有している情報をしっかりと公開することだと思う。これまで私は行政に対し何度も情報公開をお願いしてきた。しかし、実際に、行政のことを把握できるのは、全体の100分の1、1,000分の1と言ってもいいくらいである。これには大変な労力も要する。
- ・ 先日は、(仮称)城下町ホールの関係で、加藤市長名で「異議を棄却する」という通知をもらった。私が聞きたかったのは、「区分工事費の内訳を知りたい」ということだけであった。実際には、墨塗りの通知で絶対に教えてくれなかった。なぜかという、入札の妨害になるからという論理であった。
- ・ しかし、市民の税金を使い、大きなプロジェクトで建物をつくる際には、どういうものができるのか、市民は知る権利があると思う。新市長には徹底した情報公開を進めてもらうとともに、こういう不幸な事態を避けることこそが、これからの市政の最大の方角になるのではないかと思う。ぜひ情報公開を進めていただきたい。

加藤市長

- ・ 今お話があった、(仮称)城下町ホールの設計については、ほぼ見直しをせざるを得ない状況の中で、立地については私が判断をさせていただいた。これから先大切なことは、ご意見にあったようなことに、市がしっかりと答えていくことだと思うので、皆さんには厳しくチェックをしていただきたい。こちらも可能な限りお答えしていく覚悟である。

(7) 酒匂川流域を一体としたまちづくりを進めてほしい

- ・ 私は、酒匂川流域のまちづくりをライフワークとしてやっている。昨日も農政課の関連で講演をさせていただいたが、この酒匂川流域には、全国に、また世界に誇り得る地域資源がたくさんある。二宮尊徳やメダカ、治水工事などがその例であるが、そのような中で、徳川8代将軍吉宗が行った日本の歴史上、素晴らしい改革の一つである享保の改革において、地方版の改革の成果、あるいは復興の成果を見ることができるのが、実はこの酒匂川流域なのである。
- ・ したがって、2市5町の中で、ぜひ小田原市がイニシアチブをとっていただき、そういうことを意識したまちづくりやまちおこし、または観光の目玉としてやっていただきたい。また、酒匂川流域を一体としたまちづくりを進めていってほしい。子どもの教育にもいい材料が酒匂川流域にはたくさんあるので、未来ある子どもたちのためにも、ぜひお願いしたい。

加藤市長

- ・ いろいろな場面で講師となり、今のような内容も含めて啓発活動をされているとのことで、とても頼もしく感じた。お話のとおり、酒匂川では1,600年以降、川の氾濫や天災等があり、困窮した流域の領民をいかに救っていくかということの中で、治水工事も含め、様々な事業が行われ、その中で二宮尊徳さんや大友亀太郎さんなどが活躍された。そういった、先人たちの100年以上にわたる労苦によって築かれたこの足柄平野にある地域資源、またはそのプロセスを今のまちづくりに活かさないかという提案に対しては、全く私も同感である。
- ・ とかく、知名度が高い二宮尊徳さん等に焦点が当たってしまうが、それ以外にも在野で活躍された方の話がこの地域にはたくさんあるので、それをもっと訴えかけていく方法はあると思う。そのようなことを小田原市の枠を越えて、酒匂川流域圏全体に広げていってほしいというご提案は、これからのまちづくりの参考とさせていただきたい。

(8) 地域の活動に参加するよう働きかけてほしい

- ・ 先ほどの市長の話では、地域にもっと仕事が増えそうな感じであった。私自身、自治会長をやっており、そのほかにも、役がないということで、老人会や体育振興会などにも関わっているため、忙しすぎて困っている。また、地域では子どもが子ども会に入会しないためつぶれてしまったり、老人会への入会者が少なかったりといった現状がある。もっと若い人たちが地域に入ってやってもらわないと困る。
- ・ 先日も地域の見回り活動に参加したが、自治会や老人会のメンバーばかりで、子どもを持つ若い人たちがあまり手伝ってくれない。市長さんもまだ若いので、そういう若い人たちに地域の活動に参加してもらうよう働きかけていただき、小田原のまちをみんなでもよくしていきたいと思っている。

加藤市長

- ・ 自治会長の皆さんは、多くの役職を持って活動されており、私たちの世代は本当に頭が下がる思いである。私自身も以前、PTA会長をやっており、参加を促すいろいろな仕組みをつくってきたが、若い世代の中でも来てくれるメンバーは決まっていた。
- ・ そういったあまり参加されない方たちに、どうやって地域に入ってもらおうかという課題については、正面から取り組まなければならないと思っている。それを加速するために、忙しい皆さんにすべてをお任せするのではなくて、職員が責任をもって地域に入って、いろいろな方たちの参画を掘り起こすことが大切だと思っている。
- ・ 市役所には様々な年代の職員がいるが、40代前後の職員が比較的多いので、そういう職員に積極的に地域に入ってもらい、事務局として動かしていく仕組みをつくっていきたいと考えている。これをやったらすぐに人が集まるということは難しいが、一つ一つ動いていく中で人材の掘り起こしをしていき、皆さんのお手伝いができればと思っている。

(9) 企業とのかかわり方について

- ・ 市長は「地場産力でまちを活性化する」と述べられており、とても結構なことだと思う。小田原にはいろいろな商業施設があり一見活気があるように見えるが、この小田原の地で、生活が安定した正社員がどの程度働いているのか、ということを考えてみると将来が不安である。
- ・ 例えば、ユアサコーポレーションをはじめ、企業がどんどん撤退していくという状況の中で、市民は最終的な決定しか聞くことができず、とても不安に感じている。若い人たちの就労の場が減っていくことに対処するためにも、市が行政力を発揮して、ある程度企業に立ち入っていくことが必要だと思う。企業が撤退していくということに対して、市はどのような時期にどのような形でかかわっているのか伺いたい。

加藤市長

- ・ おっしゃるとおり、事業の統合や業務部門の整理といった流れは、この小田原でも避けがたいものがあり、それはとても残念に感じている。参考までに、羽根尾地区の西湘テクノパークは、現在約75%が成約しており、今後ほぼ埋まっていく方向にある。
- ・ ユアサコーポレーションの撤退については、昨年の段階から話が来ており、今年度一杯は操業を続けるとのことである。しかしながら、撤退後の跡地の利活用については、案が定まっていないようであり、地域の皆さんには大変ご心配をおかけしている。市としても当然のことながら、工業地域となっている当該地において、ユアサに代わる一定規模の事業所、しかも本社機能を持った事業所が、神奈川県「インベスト神奈川」等の制度を使いながら、何とか来ていただけるよう、市経済部を通じて相談しているところである。このことについては、改めてユアサさんにもお願いするとともに、地域の皆様にご心配が及ぶことのないよう、しっかり対応をしていきたい。
- ・ また、小田原に在籍してくださっている企業の経営者の皆さんのところには、時間の許す限り足を運んで、小田原に定着していただくことはもちろ

んのこと、小田原を軸にした事業の拡大をお願いしていくつもりである。

- ・ なお、新規の工場用地の拡大については、用途地域の関係やこれから小田原が何を大事にしていくのかという長期的な戦略の話にもなるので、慎重に話を進めていきたいと考えている。

加部副市長

- ・ 市も企業の情報を知りたいし、企業からの要望もあるので、市内大手企業の方々とは情報交換会を行い、関係を密にしている。しかし、企業の存続に関わる情報などについては、いくら行政といえども、ある程度決まった段階での発表になってしまう。その後、お願いに行っても会社の方針として決まったことだからという対応になってしまうのが、正直なところである。
- ・ よって、どの段階で市が知り得るのかという話になると、かなり企業として意思決定がされた段階でというお答えになってしまうのが現状である。

(10) 待機児童数について

- ・ 現在、小田原市では、待機児童がどれくらいいるのか伺いたい。また、無認可の保育所に預けている方が多いと思うが、私が知っているコミュニティハウスでは、待機児童の解消に向けて整備するという話があったが、小田原市はどのように考えているのか。

加藤市長

- ・ 待機児童の数については、年度初めで30人から40人であると聞いており、これが年度の後半に差しかかるともっと増える。特にこの川東地域では、入園の見込みがなかなか得られないという状況があることは私も承知している。今後どうやってこの受け皿づくりをしていくかということについては、内部で慎重に検討をしているところである。

加部副市長

- ・ 待機児童の数をカウントするにあたっては、正規の保育所に行きたくても行けない場合には待機児童としているが、無認可の保育所のうち、認定保育施設に行っている児童は待機児童としてはカウントしていない。無認可保育所といってもいろいろな形態の保育所があり、できるだけ認可に近い保育所にしてもらおうよう、指導・推進をしている。

(11) 太鼓演奏を活かしたまちづくりについて

- ・ 私は市民の活力という視点から、意見というか、夢のような話をしたい。神戸で震災の復興事業の一つとして、「太鼓で心をつなげる」という催しが行われた。この小田原にも小田原北條太鼓をはじめ、様々な太鼓活動があると思う。
- ・ そのような中で、小田原を愛してくださっている太鼓演奏者林英哲さんの一番弟子の方が、プロの太鼓演奏者から叩いたことがない方まで千人の方々の参加を得て、太鼓を演奏する「千の海響」という復興事業を開催され、それを聞いた私は非常に感動を覚えた。
- ・ 小田原もいつ地震が来てもおかしくないという状況の中で、私はこの神戸の太鼓の演奏会から、一個の人間でも、小さな人間でもだれでもできる可能性を持っているということを学んだ。千人というのは例えかもしれないが、小田原でもみんなで心をつなげて太鼓を叩くというようなことができたら素晴らしいと思っており、それが新しい市民ホールの起爆剤にできないかと思っている。

加藤市長

- ・ 小田原にも様々な芸術活動、文化活動をしている団体が数多くあり、今後、新しい市民ホールを皆さんの力で生みだしていただくプロセスの中で、一つでも多く小田原らしい、特に市民の皆さんが担っていく文化の素材をつくっていきたいと考えている。そのような熟成を経て、新しい市民ホールを迎えることができれば素晴らしいと思う。
- ・ お話のあった千人太鼓の構想は、ぜひとも市民レベルで育てていただき、

そのような演奏が聞けることを願っている。

(12) 合宿施設を整備してほしい

- ・ 小田原市の中学校は、西湘地区の中でも有数の吹奏楽の実力を持っている。そのような中で、市内の公共施設で合宿練習をできる場所が、栢山の尊徳記念館しかない。去年は県大会に出場するため、尊徳記念館に宿泊の申し込みをしたが取れず、河口湖まで行くことになってしまった。市内では宿泊施設としてアジアセンターがあると思うが、そういう施設を利用するなどして、各校が思う存分練習できる合宿施設を整備してほしい。

加藤市長

- ・ 吹奏楽の活動をはじめとした文化活動などは、次世代の子どもたちを育てていくために本当に大切な分野だと考えている。合宿練習ができる場所がほしいということであるが、残念ながらアジアセンターは2年ほど前に閉鎖となり、現在は更地になってしまっている。
- ・ これから、小田原の中で新たな場所を確保してつくり込んでいくことは、大変難しいため、既存施設などが利用できないかと教育委員会にも相談をしている。1、2年の間にすぐというわけにはいかないが、宿泊研修のような場所も含めて、教育センターの場となり得るような空間がつかれないか、そういうテーマを持って、一部、教育委員会の方では検討しているので、今後ご相談をさせていただきたいし、ご意見などもいただければありがたいと思っている。

(13) お城通り再開発事業等にかかる一連の報道について説明してほしい

- ・ お城通り再開発事業等の問題については新聞紙上で読んだだけで、私たちは本当の市長の気持ちが分からない。議員に説明されたとのことであるが、ぜひこの場でも説明をお願いしたい。
- ・ また、アーバンコーポレイションは民事再生法の適用を受け、いわゆる倒産寸前の状態となっている。一般の感覚としては、今後そういう会社と付

き合っていくのではなく、別の会社にお願いしたり、計画自体を練り直したりといった、新たな方向づけが必要ではないかと思うが、市長の考えを伺いたい。

加藤市長

- ・ まず大前提として、現在の市政には市民の命にかかわる、多様で広範な課題が山積しており、これに対して、時間の猶予なく解決の手法を考えていかなければならない。その手段は、平成23年4月から始まる新総合計画に向けて、全市一丸となって取り組む状況をつくることだと思っている。そこに、職員のエネルギー、また市民の皆さんの意識を集め、一定の形をつくり、新しい小田原をつくっていく中で、様々な課題を解決していくことが、今小田原が取り組むべき一番重要なことだと思っている。
- ・ したがって、駅周辺の問題については、できるだけ早期に一定の方針をお示しし、皆さんに十分議論をしてもらうような土台をつくる必要がある。その方針にあたっては、大きく4つの視点で考えた。一つ目は、建築技術と財政面での問題。二つ目は、どれくらいの交流人口の拡大ができるのかといった効果の問題。三つ目は、無限に時間をかけて議論ができないという状況の中で、一定の短い時間の中で実現できるのかといった時期の問題。最後は、市民の意識や20年間にわたる検討経緯への配慮。これらを総合的に考え、市民ホールは三の丸地区に戻すことになった。しかし、お城通り駅前再開発事業と新しい市民ホールの両案とも、計画は始めから見直すということになる。よって、実質的には、両事業は全く新しいものに生まれ変わるということになる。
- ・ 立地については元に戻す形になったが、それについては言葉を尽くしてお伝えしていきたいと思っている。また、敷地については、現在の狭い敷地だけでなく、周辺の用地を拡大していかなければ、十分な空間が得られないと思っており、それらを同時にやっていく中で、これから皆さんと検討していきたいと思っている。
- ・ そういった方針をもとに、検討委員会についての予算が今回の9月議会で

認められれば、そこから先は、市民の皆さんや専門家の皆さんによる専門委員会に託し、市民参加のプロセスに入っていくことができると思う。これらのことについては、週明け早々にホームページや広報紙など、考えられる媒体を使ってきちんと説明をしていきたいと思っている。

- ・ なお、アーバンコーポレイションの問題については、覚書を交わしただけではあるが、一部、国・県・市からの補助金が執行されていることや、アーバンコーポレイションが準備組合に負担金を払っているという、金銭の行き来が発生している。これが今後、民事再生法のプロセスの中でどういう取り扱いになるのかが、一つ焦点としてある。
- ・ したがって、この段階で準備組合が一定の方向性を出すことが、その取り扱いに影響を及ぼす可能性があるため、法的にリスクを確認した上で対応することが必要となっている。現在、それらを確認しているところなので、確認が終わりしだい、準備組合としての判断を皆さんにお伝えすることになると思う。

(14) 職員の意識改革や指導をお願いしたい

- ・ この中里地区は、急激な発展によりいろいろな問題が山積している中で、防犯活動や子どもの見守り活動など、地域でできることは地域でやっている。しかし、地域だけでは解決できない問題もあり、そのような時は行政をお願いに行っている。
- ・ その際、懇切丁寧に対応してくれる窓口もあるが、ある道路関係の課では、相談したところ、安全管理の関係でできないと、そっけない対応をされた。地域としては、行政の力を借りないと解決できないことがあるので、なるべくそういうことがないように、職員の意識改革や指導をお願いしたい。

加藤市長

- ・ 職員の意識として、まだまだ体質的に古いところがある。大事なことは市民感覚を持つことと、もっと職員が地域の中に入っていくことだと思う。

職員が地域の中に入って一緒に働くような環境をつくることが一番の意識改革になると思うので、早くそういう状態をつくっていきたいと考えている。今後とも厳しい指導をお願いしたい。

大野副市長

- ・ 市民と行政とが一体となってやっていくことが大事である。また、行政にできないことは民に任せるなどして、お互い信頼感を持ってやっていくことは基本的なことだと思う。そういうことを職員と話し合い、また厳しい指導もしながら、新しい市長の下、努力していきたいと思っている。